

産学連携によりプラスチックの新たな可能性にチャレンジ

梅本樹脂工業株式会社 奈良県大和高田市

1962 年創業のプラスチック製品製造業、梅本樹脂工業株式会社は、日用雑貨、照明器具の部品から鉄道・船舶関係の部品まで大小様々な製品を生産している。2007 年、37 歳にして先代から事業を引き継いだ現社長は「やるなら自分のやり方で」と、経営改革に乗り出し、新たに販路を開拓。依頼された難しい成形を成功させたこと等により技術力が広く認められるなど、徐々に実績を積み重ねてきた。

現在同社は、奈良工業高等専門学校と連携して新素材セルロースナノファイバーの研究開発に取り組んでいる。

創業 55 周年を迎え、第二工場が竣工した同社。奈良県プラスチック業界において、今後さらに存在感が高まることが期待される。

会社概要



会社名：梅本樹脂工業株式会社
所在地：奈良県大和高田市根成柿 195
電話：0745-23-1578
FAX：0745-23-5188
創業：1962（昭和 37）年 12 月
設立：1970（昭和 45）年 4 月
代表者：代表取締役社長 梅本 和彦
資本金：10 百万円
従業員：35 名（パート含む）
事業内容：プラスチック製品製造
URL：<http://www.umemotojyushi.com/>



本社社屋

自宅の納屋にて創業

プラスチック製品製造業の梅本樹脂工業株式会社は、日用雑貨から産業用機械部品まで大小様々なプラスチック製品を生産している。創業は 1962 年で、配置売薬と農家を兼業していた先代社長、梅本和美氏が「農業では食べていけない」と自宅の納屋にプラスチック成形機を設置。弟、従兄弟と 3 人で、熱硬化性樹脂*により、食器類や電灯などに用いるスイッチ等の成形を始めた。

※プラスチックは、熱を加え柔らかくして加工した後に冷やして硬化させる熱可塑性樹脂と、熱を加えることで硬化する熱硬化性樹脂の 2 種類に大別され、プラスチック製品製造企業の大半は熱可塑性樹脂を扱っている。

1970 年に法人成りを果たし、1981 年には現在の本社がある大和高田工場が完成。義理堅い先代の人柄の良さは、知人の紹介等を通じて販路の拡大をもたらした一方で、業況が芳しくない取引先とも最後まで取引を継続し、売上債権の回収不能を招くこともあった。「人を騙すくらいなら騙されるほうがマシである」が、先代の信条だった。

37 歳にして先代から事業を承継

2007 年、70 歳近くになっていた先代は、長男で現社長の梅本和彦氏に経営を譲ることにした。社長は当時 37 歳で営業を任されていたが、経理面には関与しておらず、同社が多額の債務を抱えていたこともこのとき初めて知ったという。しかし、事業を引き継ぐ以外に選択肢はなく、「やるなら自分のやり方で」と一念発起。経営改革に乗り出し、小切手や手形での決済をやめ、銀行取引のシステム化や無線 LAN の導入など、IT 化を進めた。

また、時を同じくして、事業の主軸を熱硬化性樹脂から熱可塑性樹脂に移行させ、自ら全国各地を回って新規取引先の開拓に精を出した。訪問先

では名刺も受け取ってもらえず、門前払いされることも珍しくなかったが、先代の事業基盤を漫然と引き継ぐつもりはなかった。

そのような中、アパレル業界向けの繊維加工機メーカーから、衣類の自動裁断機の部品の製造依頼が舞い込んだ。その部品は成形が難しく、他社でも成形を試みたが対応できなかったことから、同社の技術力が試される機会となった。社長は弟と協力し、試行錯誤を重ねることで成形に成功。裁断機は高く評価され、同社の技術力も広く認められることとなり、これがきっかけで販路拡大にも弾みがついた。

また、同社では学童用の教材も手掛けており、15年前より生産しているアサガオの栽培用キットは、全国の1学年の児童数の半分に当たる50万セットを毎年供給している。

こうした実績の積み重ねにより、最初は孫請け・曾孫請けだったメーカーとも直接取引ができるまでになり、現在はステーションリーから飲料メーカーの販促ツール、照明器具の部品、鉄道関係、船舶関係の装置部品まで、多種多様なプラスチック製品を生産している。



照明器具や鉄道関係部品（上）と
アサガオの栽培用キット（右）

産学連携により新素材の研究開発に取り組む

現在、同社では奈良工業高等専門学校と連携して、新素材セルロースナノファイバー（以下、CNF）を配合した樹脂によるプラスチック成形の研究開発に取り組んでいる。CNFは植物繊維の主成分セルロースをナノ（10億分の1）レベル

まで微細に加工した物質で、樹脂に配合することで、強度は鉄の5倍、重さは7分の1と物性が飛躍的に高まることから、自動車の構造材など幅広い分野での応用が期待されている。社長が提案した熱硬化性樹脂への配合・成形の研究開発は県内でも珍しい取組みで、精度の高い研究結果を導くため、新たにデジタル制御のプラスチック成形機も導入した。奈良県には豊富な森林資源があり、CNFの量産が可能となることで「奈良県地場産業であるプラスチック業界と森林業界がともに活性化することを願っている」と社長はいう。

創業55周年の節目に第二工場が竣工

今年、創業55周年を迎える同社では、京奈和自動車道沿いの好立地を活かした第二工場が9月に竣工した。先代が建てた大和高田工場と同規模を誇り、時を経て先代と同じ道のりを歩む社長は、「二代目は、事業基盤も取引先も出来上がっていて、敷かれたレールの上を走るだけ。自分はそうはなりたくなかった」と、事業を引き継いでから現在に至るまでの奮闘の日々を感慨深く振り返る。



9月に竣工した第二工場

先代から事業を引き継いだときに多額の借入金を抱えていたことで、却ってハングリー精神に火がつき「人の力を借りずに自分の力で商売をすること」「何事も途中で諦めず、全力投球で最後までやりきること」を肝に命じて、社業に懸命に取り組んできたと語る。

創業者からの事業承継を経て、新たな歴史を刻み続ける同社。新素材CNFの可能性を追求し、奈良県プラスチック業界における存在感が今後さらに高まることを期待する。（前田 徹、中井正人）